はしがき

ようやく、多数の方々のお力をお借りして、『〈役割語〉小辞典』を世に送り出すことができた。このプロジェクトの始動は二〇〇九年三月に遡る。足かけ六年もかかってしまったのはひたすら編者の怠慢による。関係各位へお礼とともにお詫びを申し上げます。

本書はいわば、世界で初めての役割語に関する辞書である。歴史主義と言うべきか、時系列的な語誌の記述を重視したところに特徴があると言えよう。私を除く執筆者の岩田美穂さん、大田垣仁さん、岡﨑友子さん、廣坂直子さん、藤本真理子さん、依田恵美さん（五十音順）はすべて編者の勤務校である大阪大学で国語学の大学院の課程を修了した方々ばかりで、文献の読解・理論面の理解の能力に秀で、なおかつ読み物として面白い原稿を提供してくださった。本辞書になにがしかの魅力があるとすれば、それは何よりも執筆者の方々の力量に負うところ大なのである。

本辞書は同時に、科学研究費補助金「役割語の理論的基盤に関する総合的研究」（研究課

題番号：一九三二〇〇六〇、研究期間：二〇〇七～二〇一〇年度、研究代表者：金水敏）および「役割語の総合的研究」（研究課題番号：二三三二〇〇八七、研究期間：二〇一一～二〇一四年度、研究代表者：金水敏）の成果であり、同科研費のメンバーの皆さんのご研究が本辞書の基盤となっている。また、同科研費の研究補助員の山本一巴さんは、最終段階の原稿整理の作業をしっかり勤めてくださった。同科研費の研究分担者、連携研究者、研究協力者、特任研究員、研究補助員の皆様に心よりお礼を申し上げます。

なお本辞書は、多くのマンガ資料から用例を採っているが、資料の閲覧に対して、京都精華大学国際マンガ研究センター／京都国際マンガミュージアムには格段のご配慮をいただいた。伊藤遊さんはじめ、研究センター／ミュージアムの皆様にお礼を申し上げます。

最後に、編集作業を最初から最後まで支えてくださった研究社の高橋麻古さん、本当にお世話になりました。思うように作業の進捗しない時期には心穏やかならぬ日々を過ごしてこられたはずだが、高橋さんは怠惰な私たち編者・執筆者に常に優しく時にきびしく、粘り強く接してくださり、お陰で私たちは最後まで緊張感を持って作業をすすめることができた。細かい調整や校正、付録の作成など骨の折れる作業も、時間的に厳しい状況の中、高橋さんは冷静かつ綿密にこなされた。この辞書が辞書として体裁を保てているのは、すべて高橋麻古さんのおかげです。ありがとうございました。

初めての試みゆえに、まだまだ課題の残る本辞書であるが、今後はユーザーの皆様の評価を受けて、よりよいものに改訂していきたいと考えている。なにとぞ末永くお付き合いくださいますようお願い申し上げます。

二〇一四年八月

金水　敏

目次

はしがき……i
役割語とは何か——この辞典を利用する前に……v
凡例……xvi
見出し語一覧……xviii
〈役割語〉小辞典……1
引用出典一覧……216
参考文献……236
役割語名索引……243
編著者・執筆者紹介……245

役割語とは何か——この辞典を利用する前に

金水　敏（編集代表）

役割語の定義

本書は、世界で初めての「役割語」に関する辞書です。役割語、という言葉を初めて見る方もあるかもしれませんので、説明をします。

まず、次の例文をご覧ください。ちょっとしたクイズです。うしろに話し手のリストが付いていますので、どのせりふをどの人物が話したか、結びつけてみてください。

a　おお、そうじゃ、わしが知っておるんじゃ。
b　あら、そうよ、わたくしが知っておりますわ。
c　うん、そうだよ、ぼくが知ってるよ。
d　んだ、んだ、おら知ってるだ。
e　そやそや、わしが知ってまっせー。
f　うむ、さよう、せっしゃが存じておりまする。

1　関西人　　2　老人　　3　男の子
4　武士　　5　田舎者　　6　お嬢様

日本で育った日本語の母語話者ならほとんど答え合わせをするまでもないほど自明のクイズですが、なぜちゃんと正解が出るのでしょうか。それは、話し方と人物像を結びつける知識を私たちが

共有しているからです。役割語についての最初の単行本、金水（二〇〇三）には次のような定義があります。

> ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。
>
> （金水 二〇〇三・二〇五頁）

ここにもある通り、話し方と人物像が結びついているとき、その話し方を役割語というわけですが、話し方には語彙、語法、言い回し、イントネーション等の要素があると言っています。語彙とは単語のグループのことで、たとえば「一人称代名詞」というグループを考えるといいでしょう。日本語の一人称代名詞には「おれ、ぼく、わたし、あたし、うち、おいら、おら、拙者、わちき、まろ」などがあり、もうそれらを聞いただけで話し手の人物像が浮かび上がってきそうです。語法とは語と語の文法的な組み合わせ方の問題で、たとえば「書いている」と言うのか「書いておる」と言うのか「書いちょる」と言うのか、といった問題です。「言い回し」とはよく口にする決まったあいさつ言葉のようなもので、たとえば大阪の商人ですと、商売仲間と久しぶりに会うと、「もうかりまっか」「ぼちぼちでんな」と挨拶する、といったようなことがらです。

これに対して、人物像というのは、「年齢、性別、職業、階層、時代、性格、容姿・風貌、性格」とあります。特に重視したいのは、社会的な集団として私たちが常に気を遣わなくてはならない年齢・世代、性差、職業、それから住んでいる地域（都会か・田舎か、中央か・地方か）です。

性格、というとやや個人的な問題になって言葉の問題とは必ずしも関係しにくいので、少し副次的に捉えておくことにします。

本書は、このような観点から、特に役割語の語彙、加えて語法・言い回し的なところまで含んで、その方面からそれらの表現が指し示す人物像を検索できるような辞書を作ろう、という観点で発想されています。

さらに、本書を利用する上でぜひ知っておいていただきたい事項を以下に述べておきます。

ステレオタイプとフィクション

まず、役割語は現実の人物の日常的なリアルな話し方について規定するものではありません。たとえば「すてきだわ」のような表現はいかにも女性的に感じられるので、私たちはこれを**〈女ことば〉**の一要素と捉えますが、そのことは「女性の日本語話者は必ずそのような表現を用いる」とか、ましては「女性の日本語話者は用いるべきだ（用いた方がいい）」ということを主張するわけではありません。そうではなくて、「すてきだわ」のような言い方を多くの日本語話者が「女性的である」という知識を共有している、という点に注目したいのです。

このように、「実際にそうであるかどうか」はともかくとして、「こういうグループの人間はえてしてこういう性質を持っている」という知識が社会で広く共有されているとき、その知識のことを「ステレオタイプ」と言います。たとえば「女性は男性よりも感情的な言動を取りやすい」といったような知識です。ステレオタイプな知識はしばしば偏見や差別と結びつきやすく（たとえば「だから女性をリーダーにするのは避けよう」などという判断に結びつけるなど）、社会的な弊害も大きいのですが、一方でなかなか排除が難しいという性質も持っています。役割語は、言葉のステレオ

タイプと言うことができます。

ステレオタイプが最も効力を発揮するのは、フィクションにおいてです。役割語はまさしくそうです。つまり、せりふを役割語によって構成すれば、フィクションの作り手の想定した人物像が瞬時に、的確に受け手に伝わるからです。あるいはこうも言えます。ある影響力のある作り手が、いまだ充分役割語として受け入れられていない表現を作品の中で用いることによって、ステレオタイプが強化され、役割語としての認知度が高められるのです。ステレオタイプな知識は、いわゆる芸術的な作品よりも、大衆的な作品、B級作品と言われる作品でより多く活用される傾向があります。この辞典ではそういう理由で、大衆的なフィクションすなわちポピュラーカルチャー作品から数多く用例を集めています。マンガ、アニメ、ドラマ、映画、落語、漫才といった作品です。

役割語の分類

「役割語は何種類あるのか」という問いに答えることは実は難しいのですが、役割語を成り立たせている原理から考えていくと、より大きな分類から、より細かい分類へと、ある程度系統立てて整理することは可能です。先に述べた、役割語を支えるステレオタイプの基盤には、性差、年齢・世代、職業・階層、地域、時代、人間以外という分類の観点があります。この観点に沿って、本辞典で用いる役割語のラベルを整理しておきたいと思います。本辞典では役割語のラベルは**〈老人語〉**のように山カッコに括って示すこととします。

●性差

基本的な性差を反映した役割語として、**〈男ことば〉〈女ことば〉**というラベルを立てておきます。**〈男ことば〉**の語彙には、「ぼく」「おれ」「〜ぞ」「〜ぜ」「おい」「止めろ」などの命令形が含

まれます。**〈女ことば〉**の語彙には「あたし」「〜わ」「〜もの」「あら」「まあ」などが含まれます。**〈男ことば〉**は、江戸時代の江戸の**〈町人ことば〉**と、明治時代の**〈書生語〉**と言われる学生言葉が基盤となっています。**〈男ことば〉**は近代日本語の標準語の発達とともに形成されてきたと言っていいでしょう。一方**〈女ことば〉**は、江戸時代の「あそばせ言葉」と呼ばれる丁寧な話し方を基盤としつつ、明治時代の「女学生言葉」（あるいは「てよだわ言葉」）の要素が多く取り入れられています。明治時代以降の近代小説をはじめとする近代的なフィクションの中で、女性キャラクターを描写するために大いに発達しました。

さて、**〈男ことば〉**の基盤の一つである**〈書生語〉**には、「ぼく」「きみ」「吾輩」「諸君」「失敬」「〜たまえ」などの語彙が含まれていました。「ぼく」は**〈男ことば〉**の一般的な代名詞となっただけでなく、**〈少年語〉**の代表的な一人称代名詞にもなっています。「〜たまえ」は、今日では地位や権力を持った男性が用いる**〈上司語〉**の語彙に流れ込んでいます。

〈女ことば〉の基盤となった女学生言葉のうち、「〜てよ」「〜こと」「〜です（ます）わ」などは、今日日常会話の中ではあまり聞かれなくなりました。これらは**〈お嬢様ことば〉**〈奥様ことば〉として認識される場合が多いでしょう。「〜ざ（あ）ます」も**〈奥様ことば〉**の一つです。

トランスジェンダーな人々の言葉を指し示す**〈おネエことば〉**もここに入れておきますが、語彙的には**〈女ことば〉**におおむね包摂されると言えるでしょう。

●年齢・世代

日本語の役割語でひときわ精彩を放ち続けるものに、**〈老人語〉**があります。「わし」「〜おる」「〜じゃ」などの語彙が含まれます。**〈老人語〉**と**〈書生語〉**が複合した**〈博士語〉**もポピュラーカルチャー作品の中では盛んに用いられます。**〈老**

人語〉は、江戸時代後期の江戸の町人たちの言葉の中で、当時権威を持っていた上方（京都・大阪）語が、急速に発展してきた江戸語との対比の中で老人の言葉として認識されるようになったことを反映しています。すなわち、〈**老人語**〉は〈**上方語**〉に由来する言葉の一つと言えます。なお、江戸語はその後、近代の東京の言葉となり、さらに標準語の基盤となりました。

〈**老人語**〉は男性の話し手が一般に目立ちますが、女性の使い手もいます。また〈**おばあさん語**〉として見た場合には、〈**老人語**〉とまったく同じ「わしは～じゃよ」と言うおばあさんと、「あたしゃ～だよ」と言うおばあさんの二種に分けられるということが言えます。後者は、江戸の〈**町人ことば**〉や東京の〈**下町ことば**〉に近い言語です。

また〈**老人語**〉の応用として、〈**王様・貴族語**〉〈**お姫様ことば**〉などがあります。「～じゃ」を用いるところが共通で、一人称代名詞は王様であれば「わし」、お姫様であれば「わらわ」が用いられることが多いでしょう。

〈**幼児語**〉には性差はさほど反映されません。「あたち」「～でちゅ」などの幼児らしい舌足らずな話し方が〈**幼児語**〉の典型です。

●職業・階層

〈**博士語**〉（〈**老人語**〉）、〈**上司語**〉、〈**お嬢様ことば**〉〈**奥様ことば**〉などは、知的水準や経済水準の高い男女の言葉づかいと言っていいでしょう。一方で、〈**やくざことば**〉〈**ヤンキー語**〉〈**スケバン語**〉などは、アウトローな人々の言葉づかいとして位置づけられます。

特殊な職業に由来する役割語として、〈**軍隊語**〉と〈**遊女ことば**〉が挙げられます。前者は、第二次世界大戦前の日本陸軍に由来する表現が多く見られます。「自分」「～であります」「ぎさま」などがそれです。また〈**遊女ことば**〉には「わちき（あちき）」「～でありんす」など、江戸時代の

遊郭の言葉を源泉とする表現が含まれます。

●**地域**

中央に対する周縁の地域の言葉を表す役割語として、**〈田舎ことば〉**があります。「おら」「〜するだ」「知らねえ」「ごぜえます」などの語彙が含まれます。**〈田舎ことば〉**はしばしば現実のいろいろな方言の要素が混ぜ合わされており、特定の方言に限定することはできません。

現実の方言をより色濃く反映したものとして、**〈大阪弁・関西弁〉〈京ことば〉〈九州弁〉〈土佐弁〉〈沖縄ことば〉**などがあります。**〈大阪弁・関西弁〉**はポピュラーカルチャーの歴史の中でも古くから用いられてきた、伝統ある役割語の一つと言えるでしょう。今日、関西出身の芸人の言葉として広く知られており、関西以外の人でも「なんでやねん」「ぼちぼちでんな」などは遊び的な文脈の中でしばしば用いられるところです。関西弁の中でも**〈京ことば〉**は「おす」「〜どす」などを含み、**〈舞妓ことば〉**や京都のお店の言葉として表現されることがよくあります。**〈九州弁〉**は「おいどん」「〜ばい」「〜たい」「〜と」「〜ごわす」などを含みますが、特に「おいどん」「〜ごわす」は西郷隆盛の鹿児島弁としてしばしば用いられるところです。**〈土佐弁〉**は言うまでもなく坂本竜馬とともに広められました。竜馬が**〈土佐弁〉**を多く話すようになったのはフィクションの中では司馬遼太郎『竜馬がゆく』が早い例であると言われます。**〈沖縄ことば〉**はＮＨＫ朝の連続テレビ小説『ちゅらさん』で広く認識されるようになった言葉で、「おばあ」「知ってるさあ」「なんくるないさあ」などの語が含まれます。

外国人を表現する**〈片言〉〈ピジン〉**もここに位置づけておきます。西洋人はしばしば「オー、わたしそれ、わかりませーん」などの話し方で表現されます。中国人は「それ違うある。早く払うよろし」などのいわゆる**〈アルヨことば〉**の使い手として表現されます。黒人奴隷の言葉として

〈**田舎ことば**〉が利用されることはよく知られています。

●時代

古い時代の日本語を代表する役割語として、〈**武士ことば**〉を挙げることができるでしょう。「拙者」「ござる」「申す」「存ずる」「いたす」などの特徴的な語彙が含まれます。〈**忍者ことば**〉として今日認識されている言葉は基本的に〈**武士ことば**〉であると考えていいでしょう。リアルな忍者について決まった言葉づかいがあったという歴史的な記録はありません。

また、平安時代やそれ以後のお公家様が用いそうな言葉として〈**公家ことば**〉が挙げられます。「まろ」「おじゃる」がその代表的な語彙です。「まろ」は奈良時代から使われていますが、「おじゃる」は実は室町時代から江戸時代にかけて見られるようになった言葉で、特に貴族に限定された表現ではありません。〈**遊女ことば**〉〈**町人ことば**〉も時代劇によく用いられます。

●人間以外

オタク文化の中ではしばしば「人外（じんがい）」と表現される領域です。〈**宇宙人語**〉として「ワレワレハウチュウジンダ」のように文字であればカタカナで書かれ、音声であれば機械的で平板なイントネーションで話される表現があります。〈**ロボット語**〉も〈**宇宙人語**〉とよく似て、「ワタシハロボットデス」などと表現されます。

〈**動物語**〉もここに挙げられます。「知らないワン」「そうだニャー」など、「キャラ語尾」（キャラクターを特徴づける文末表現）を使った表現がよく用いられます。狂言、文楽、歌舞伎などに見られる「狐言葉」も〈**動物語**〉の一種と言えるでしょう。

妖精や宇宙人の類いでも、先に述べたキャラ語尾はよく用いられます。「そうだクポ」「そうだピョーン」などと、いくらでも新しいパターンを

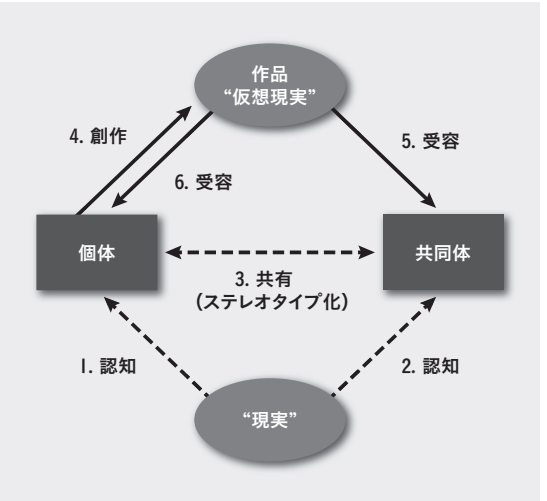
作り出すことが可能です。

神様や幽霊などの超常的な存在物は、しばしば文語で話します。「我はこの湖の守り神なるぞ」「恨み晴らさでおくべきか」などがそれに当たり、**〈神様語〉〈幽霊ことば〉**と位置づけられます。

役割語の歴史的な形成過程

下図をご覧ください。これは、役割語の歴史的な形成・継承・拡散の過程を図示したものです。

役割語の源泉として、多くの場合、現実の社会的グループに特有の表現がとられます。ただしリアルな表現がそのまま役割語になるのではなく、整理・単純化され、一定の語形が繰り返し使われることで役割語として定着していきます。また現実の話者の話し方は実は千差万別で、決してステレオタイプにはまらないことが通常ですが、役割語では逆に過剰に社会的グループと話し方との関係を強調します。一定の話し方とグループとの関係が、個人のみならず共同体に共有知識として認識されている状況で、そのステレオタイプを表現に用いたのが役割語と言えます。共有知識が必ず



しも完全でなくても、影響力のある作り手が作品の中で特定の表現を特定のグループの表現として用いると、ステレオタイプが固定・強化されるということも言えます。いったんその関係が知識として共同体に共有されると、現実の状況とは関係なく、役割語は何世代にもわたって創作物の中で継承し、生き続けていきます。**〈老人語〉**がその典型として挙げられるでしょう。

一方で、現実社会における話し方が変化してくると、役割語も影響を受けて変化する場合があります。言葉の性差という点では、かつての**〈女ことば〉**の一部はむしろリアルさを欠く**〈お嬢様ことば〉**や**〈奥様ことば〉**にシフトしており、普通の女性の話し言葉としてはあまり性差のない表現がむしろ使われる、といった現象は、時代とともに役割語が変化する例と言ってよいでしょう。

なお、先に挙げた「人間以外」の話し方は、基本的に現実ではなく、特定の作者の想像力から生み出された話し方が、後続する作品で受け継がれた、ということを示しています。

この辞典では、語釈の中で、できるだけこういった歴史的な過程を丁寧に説明するように心がけています。用例も、役割語として固定する以前のもの、役割語として用いられた最初の頃のもの、役割語の用法が変化した頃のものなど、歴史的変遷がつかみやすくなるように考えています。

用例の示し方

役割語の用例を示す際には、可能な限り、作品のジャンル、作品名、作者等、初出年を各用例に付しています。一件煩瑣な情報が多いようにも見えますが、これは、先に述べた歴史的な形成過程を重要と考えるからです。なお、作品の初出年と、実際に典拠とした作品の出版年等は必ずしも一致しません。初出年は、たとえばマンガであれば雑誌に掲載された年（あるいは期間）または最

初に単行本化された年を示しています。用例を実際に採集した原典は、巻末の引用出典一覧に示してありますのでご参照ください。

こんな方にお勧めします

この辞典は、誰がどんな目的で使うのでしょうか。私たちは、次のような皆様を読者として想定しています。

- 日本語、特に役割語に興味を持つ一般読者。
- ポピュラーカルチャー作品を、より深く楽しみたいファンの方々。
- ポピュラーカルチャー作品の製作に当たっている方、またはそれを目指している方。
- 外国作品の日本語への翻訳、あるいは日本作品の外国語への翻訳をしている方。
- リアルな日本語と役割語の区別をよく知り、日本語の学習に役立てたい日本語学習者、日本語教育関係者。

各項目の語釈は、スペースの関係もあって簡潔を旨とはしましたが、読み物としてもある程度楽しめるような記述を心がけました。この辞書を通じ、日本語の持つ幅広い魅力を感じていただけましたら幸いです。

※この前書きの基盤になっている研究文献は、巻末の参考文献に挙げてありますのでご参照ください。

凡例

見出し

1. 見出しは見出しの読みを現代仮名遣い表記で示した。
2. 項目は、見出しの読みによって五十音順に配列した。
3. 見出しの下に、表意的な表記を漢字仮名交じりで示した。さらにその下に見出し語句の品詞名を記した。品詞は、いわゆる学校文法に従い、「感動詞」「形容詞」「形容動詞」「サ変動詞語幹」「助詞」「助動詞」「接続詞」「接頭辞」「代名詞」「動詞」「副詞」「名詞」「連語」とした。

本文

1. 見出しのあとに、概要をしめすリードを数行付けた。リードの後に、詳細な語釈を付けた。
2. 語釈は内容のまとまりごとに「▼」で区切って示した。また、各まとまりごとに、用例を一例ないし数例掲げた。
3. 用例は、「＊」印のあとに、原則としてジャンル名、作品名、作者名、初出年（期間）、用例の本体の順で示した。初出年（期間）は、雑誌等への最初の発表年・掲載期間、または最初の単行本の出版年とした。用例の本体では、話者や場面等の注記を適宜（　）に括ってしめした。用例の表記は読みやすさのために原文から適宜変更している場合がある。
4. 語釈のなかで適宜、見出し語句に該当する役割語の分類名を〈　〉に括って示した。
5. 本文中に、他に立項されている語がある場合

はその語を太字で示した。本文中にはないが、参照するのが望ましい項目がある場合は、本文末尾の「↓」の後にその項目名を挙げた。

6. 各項目の末尾に、執筆者の姓を［　］に括って記した。

付録

1. 巻末に、「引用出典一覧」、「参考文献」、「役割語名索引」を掲げた。

2. 「引用出典一覧」は、本文で示した用例のうち、書籍として刊行されているものに限って示し、ジャンルごとに分類した。ジャンルは「エッセー・随筆」「絵本」「演説」「歌舞伎・浄瑠璃」「脚本」「狂言」「記録」「講談」「滑稽本」「古典」「洒落本」「小説」「新聞」「童話」「人情本」「俳諧・雑俳」「翻訳」「マンガ」「漫才」「読本」「落語」「和歌集」とした。室町時代以前の作品は和歌集を除いてすべて「古典」とした。各ジャンルの中では、作品名の五十音順で書誌情報を提示した。ここでの書誌は、初出資料ではなく、引用に際して参照した資料のものである（なお、本文ではこの他のジャンルとして「アニメ」「映画」「ゲーム」「コント」「ドラマ」「バラエティ番組」「ブログ」「ラジオ書き起こし」「流行歌」も挙げている）。

3. 「参考文献」は、本辞書を作成するにあたって参考にした先行研究の書籍・論文を、著者名の五十音順で示したものである。本辞書で直接言及している文献はもちろん、特に言及はしなかったが随所で記述の基盤となっている文献も一覧に加えた。

4. 「役割語名索引」は、本文で〈　〉に括って示した役割語名をすべて集め、五十音順に配列し、その使用箇所を頁番号で示した。

見出し語一覧

あ行

あかん 1
あそばす 3
あたい 5
あたくし 8
あたし 8
あっし 11
あほ 14
あら 16
あります 17
ありんす 19
ある 20
あんた 22
いたす 24
うち 25
うらめしや 27
えらい 30
おいでやす 31
おいどん 33
おいら 35
おお 36
おおきに 39
おじゃる 41
おす 44
おたく 45
おっす 48
おぬし 50
おのれ 52
おばあ 54
おひかえなすって 55
おほほ 56
おます 56
おまん 57
おら 59
おる 62
おれ 64

か行

かしら 68
かたじけない 69
がんす 72
きさま 72
くう 74
くそ 75
くらう 76
ごしゅじんさま 78
ごぜえます 82
こと 83
ごめん 85
ごわす 86
ごんす 90

さ行

さ 92
ざあます 95

さよう 98
さらば 100
しっけい 102
じぶん 103
じゃ 105
しょくん 107
すんまへん 108
ぜ 108
せっしゃ 110
ぜよ 111
ぞ 113
それがし 115

た行

だ 117
だす 119
たまえ 120

だんな・だんなさま 123
ちゃう 124
つかわす 126
っす 127
て 128
で 130
であります 130
である 132
ですな 134
でっか 136
てやんでえ 137
と 139
とる 140

な行

なんじ 142
なんでやねん 145

ぬ 146
ね 148
ねん 150
の 151
のう 153

は行

ばってん 156
はる 158
べ 159
へい 160
へえ 162
べえ 163
へん 165
ぼく 166
ぼちぼち 169
ほほほ・おほほ 170

ほんま 174

ま行

まあ 176
まいど 177
まいる 178
まじ 180
ませ 182
まろ 184
みども 185
もうかりまっか 186
もうす 187

や行

やがる 189

よ (1) 191
よ (2) 193
よか 194
よっしゃ 195
よろしい 196

わ行

わ 198
わがはい 200
わし 202
わたくし 204
わちき 205
わて 206
わらわ 208
われ 210
われわれ 211

ん

ん 214

あ行

あかん

明かん　（連語）

動詞「明く」に打ち消しの助動詞「ぬ」が付加されたもので、「埒が明かぬ」を略した表現「明かぬ」が変化した語。「埒」とはもともと「囲い」や「しきり」、特に馬場の周囲の柵のことで、一定の範囲や限界を意味する。そこから「埒が明く」＝物事の決着がつく、「埒が明かない」＝物事がうまくいかない、駄目だという意味の表現ができた。

▼用例は江戸時代中頃の浄瑠璃や歌舞伎から見え始める。＊浄瑠璃 **祇園祭礼信仰記・四段（中邑阿契・豊竹応律・黒蔵主・三津飲子・浅田一鳥）〔一七五七〕「扨あかんあかん、何ぼいうても次風呂はならぬとおっしゃる」**▼一九五三年にテレビ放送が開始され、『番頭はんと丁稚ど

ん』（一九五九）、『てなもんや三度笠』（一九六二）など関西発信のお笑い番組が人気となったことや、『番頭はんと丁稚どん』の脚本を手掛けた花登筐（はなとこばこ）原作の浪花商人を描いたドラマ『あかんたれ』（一九七六―七八、「あかんたれ」とは「駄目なやつ」「意気地なし」の意）など、関西を舞台とするドラマの流行などからも、「あかん」は代表的な**〈大阪弁・関西弁〉**の一つとして認識されるようになった。＊ドラマ あかんたれ（原作：花登筐）〔一九七六―七八〕「やっぱりお母さん、あかんて。家にいるのも許さんて」＊マンガ 花ざかりの君たちへ①（中条比紗也）〔一九九七〕「（中津秀一〔大阪出身の高校生〕）あかんッ　あかん！　ええ若（わか）いモンが声小（こえちい）そーてどないすんねん」↓「ん」

［廣坂］

実物の書籍では
引用された図版
が入ります

ケンカのテクニックを教えるネコのミケ
佐々木倫子『動物のお医者さん④』15頁
白泉社（花とゆめコミックス）、1996年
ⓒ佐々木倫子／白泉社

あそばす

遊ばす（動詞）

古くは「詩歌・管弦をする」という意の尊敬語であり、また広く「さまざまな物事をする」意を表す尊敬語としても用いられた。近世以降には動詞の後につづく「〜あそばす」の形で多く用いられるようになる。

▼近世になると、「〜あそばす」は、「（お）〜あそばせ」という命令形で使用されることが多くなり、女性の上品ぶった言葉づかいの代表的なものとして「あそばせ言葉（遊ばせ詞）」という名称が滑稽本の『浮世風呂』などに見られる。この「あそばせ言葉」は特に、町人の娘らが武家奉公に上がった際に学んで持ち帰り広まったものとされている。＊滑稽本 **浮世風呂**（式亭三馬）〔一八〇九―一三〕「（町人の娘おさめ）**おしつけ御奉公にお上がり遊ばすと、夫こそ最う大和詞でお人柄におなり遊ばすだ。其時には私の旦那さまのやうに片はづしか、勝山にお髪をおあげさせ遊ばして、さぞお美しからう**」▼「あそばせ言葉」は、昭和初期まで、現実世界でも実際に用いられていたことが、一九五二年に文部省から出された『これからの敬語』に「おいおいにすたれる形であろう」と言及されていることからもわかる。文学作品では、明治・大正、昭和前期も含め、成人女性、とりわけ奥様と呼ばれるような

実物の書籍では引用された
図版が入ります

竹宮恵子『風と木の詩⑤』78頁
白泉社（白泉社文庫）、1995年
ⓒ竹宮恵子／白泉社

上流階級に属する女性が多く用いている（**〈奥様ことば〉**）。＊小説 金色夜叉（尾崎紅葉）〔一八九七―一九〇二〕「（満枝）貴方、嘘をお吐きなさるなら、もう少し物覚を善く遊ばせよ」▼同時期、少女雑誌の読者投稿欄などで見られる「よくってよ」などの**〈女学生ことば〉**、後の**〈お嬢様ことば〉**にもつながる言葉の使用者である少女たちが「あそばせ」を用いる例は一部確認できる程度である。＊小説 桜貝（吉屋信子）〔一九三一〕「（女学生）まあ、そんな醜態お止し遊ばせよ！」▼一九五〇年頃の少女マンガから、文末に「～てよ」や「～（だ）わ」を付ける「てよだわ言葉」や「**～かしら**」とともに、お嬢様キャラク

ターを描く際に用いられるようになるが、観念的・戯画的なお嬢様を表す〈**お嬢様ことば**〉として、「ごめんあそばせ」や「御覧あそばせ」などの決まったフレーズでの使用が中心である。＊マンガ **パーマン②**（藤子・F・不二雄）〔一九八五〕「（おてんばな女の子パー子）**ごめんあそばせ**」＊マンガ **笑う大天使①**（川原泉）〔一九八七〕「**俊介様　夜中ですのよ　お静かにあそばして♡**」→「**わ**」

［藤本］

あたい

あたい　（代名詞）

主として女性が用いる一人称代名詞（〈**女ことば**〉）。男勝りな性格の女性や教養・知性・品位の低い女性の話し手を想起させる。「〜ちまう」（接続助詞「て」＋動詞「しまう」）、「〜すりゃ」（動詞「する」の已然形＋接続助詞「ば」）などのなまりや〈**男ことば**〉の終助詞「**さ**」などとともに用いられることが多い。江戸時代以降の女性がイメージされる。

▼もともとは東京下町、または花柳（かりゅう）界の芸者や芸者見習いの少女が用いる自称詞の一つであり、主に同等の相手と話す際に用いられた。文献には明治中期頃から見られる。当時は

「流行に敏感な若い世代の女性」を想起させる役割語でもあった。「あたい」が一般的な女性像から外れた位置にいる女性を担う言葉となったのは、「**わたくし**」のくだけた形として「わたし」「**あたし**」「あたい」があり、そのなかでも「あたい」は「わたくし」との違い（音変化の度合い）が最も大きいため、より俗語的な、下品な表現と位置づけられたことによる。＊エッセー **東京婦人の通用語**（竹内久一）〔一九〇七〕「**アタイだの、否ヨだの云ふ言葉は、あれは元来芸妓屋の言葉なんだ。**（中略）**其芸妓にしろ、アタイなんて云ふ言葉は、同輩の間に使つたもので、お客の前へ出ては勿論、姉えさんに対しても、以前は決して使はなかつた。必らずアタシと言つたものである。又よくつてヨとか否ヨとか云ふ言葉は**（中略）**之れとても内輪の通用語で、他所行き言葉ではなかつた**」＊小説 **そめちがへ**（森鷗外）〔一八九七〕「**（芸者の兼吉）何、人を、そんなつひ通の分疏を聞くあたいだとお思ひか、帰るならお帰り**」▼昭和に入る頃からは個人の中で使い分ける表現のバリエーションではなく、特定の人物像――「一般的な女性像」から外れる女性像（男勝り、すれっからし、非教養層など）――を反映する自称詞となっていく。フィクションの世界では、「わたし／あたし」を用いる人物（＝一般的な女性）と対照させて描かれることも多く、アンデルセン『雪の女王』の翻訳作品では追いはぎの娘に「あたい」を充て、町の娘に「あたし」を用いている。＊童話 **雪の女王・五**（原作：ハンス・クリスチャン・アンデルセン・訳：楠山正雄）〔一九五〇〕「（追いはぎの娘→町の

娘）あたい、（中略）おまえをころさせやしないことよ。おまえはどこかの王女じゃなくて。」＊アニメ おねがいマイメロディ〜くるくるシャッフル！〜・第七話（原案：サンリオ、福嶋一芳・脚本：山田隆司）〔二〇〇六〕「（クロミ［姉御肌のウサギ］）あたい余計に腹が立っちまった！」

▼一九八〇年代の不良ブームに乗り、スカート丈の長いセーラー服を着用し、竹刀やメリケンサックなどの武器を手にした不良少女（スケバン）像が広まった。これは「あたい」が担う人物像として典型的なものとなっている〈**スケバン語**〉である。＊ドラマ 不良少女と呼ばれて・第四回（原作：原笙子）〔一九八四〕「（少年院の教務官→元スケバン）あたいではないでしょ？　汚い言葉を使うと心の中まで汚くなるんですよ（中略）わたしと言いなさい」＊マンガ バリハケン④（鈴木信也）〔二〇〇九〕「（スケバン集団メンバー→総長）アタイ達もできりゃ姉御（あねご）に手出しなんかしたくないんすよ」→「て」「わ」

［依田］

実物の書籍では引用された図版が入ります

鈴木信也『バリハケン④』138頁
集英社（ジャンプコミックス）、2009年
ⓒ鈴木信也／集英社

あたくし ― 私 （代名詞）

⬇「わたくし」

あたし ― あたし （代名詞）

男女ともに用いる一人称代名詞。「**わたくし**」が音変化してできたもの。明治時代から文献に現れる。「わたくし」が丁寧な表現であるのに対し、くだけた、俗語的な印象がある。▼役割語としては、一般的な女性像を表す**〈女ことば〉**であり、特に活発、お転婆な女性を想起させる。女性としてふるまう人物が、年齢にかかわらず、広く用いる。同様の女性像を担う自称詞として他に「わたし」があるが、これに比べると「あたし」には堅苦しさのない、より自然体の女性像や、幼さ、生意気さがイメージされる。＊マンガ **I Love You Baby ①**（小森みっこ）〔二〇一四〕「（美玲［中学一年生］→弟）**図書室で借りたの　あのねあたし…**」▼明治・大正期の小説では、「あたし」を用いるのは、幼く、女性らしい落ち着きやつつましさがまだ身に付いていない少女や、お転婆で思ったことをなんでも口に出す活発な

若い女性が多い。＊小説 **梅龍の話**（小山内薫）〔一九一二〕「（芸者の梅龍）あたし、どきつとしてよ。あたしが穿いて出た下駄に違ひないんですもの。（中略）あたしその小玉さんとか言ふ人にあやまつたわ。あたし、あやまるの大嫌ひだけども、泥坊つて言はれるのは厭だからあやまつたの。」▼その後、社会通念上の女性像にも変化が生じ、活動的な女性が一般的となった。現代では「あたし」は広く一般的な女性を表す言葉となっている。代わって、「あたし」の範囲から外れる女性像（男勝り、すれっからし、非教養層など）の自称詞には、よりくだけた形の「**あたい**」が用いられている。▼**〈おばあさん語〉**としても使用される。家庭の中で祖母の位置にある一般的な「おばあさん（おばあちゃん・おばあちゃま）」が用いる。係助詞「は」を伴って「あたしは」となるべきところが、なまって「あたしゃ」となることが特徴的である。▼妖術や拳法などの特殊な能力を持つ老女が「**わし**」と自称し、断定の助動詞「**じゃ**」など、西日本方言的な**〈老人語〉**を話すのに対し、一般的な「おばあさん」は「～ちまう」、「～なんざ」などのなまりや、断定の助動詞「だ」を使用するなど、江戸語・関東語的な言葉を話す。「わし」と自称する老女に怪しさや威厳・強さが想起されるのに対し、「あたし」と自称する「おばあさん」には、柔らかさややさしさといった女性性がイメージされる。＊マンガ **ロマンチックあ・げ・る**（一条ゆかり）〔一九八九〕「（藤間萩［祖母］↓孫）グズグズ文句いう子はあたしゃきらいだよ」▼**〈江戸ことば〉**の一部として江戸の町

人男性を表す。青年層からご隠居まで、主に大人が用いる。＊落語 寝床（古今亭志ん朝）〔二〇〇三〕「（旦那→使用人）もうあたしゃ寝るんだ。」＊マンガ 朱房の小天狗①（うしおそうじ）〔一九五五〕「（商人→岡っ引き）だってあたしがずーっといっしょについていましたからね」▼〈下町ことば〉の一部としても用いられる。東京の下町で生活を営む成人男性、あるいは東京落語の咄家を想起させる。＊映画 新・男はつらいよ（監督：小林俊一）〔一九七〇〕「（弁天屋〔下町の男性〕）いやあ、あたしゃねえ、あちらはまだ世が明けたばかりじゃないかと思いますがね」＊マンガ 昭和元禄落語心中①（雲田はるこ）〔二〇一一〕「（東京落語の咄家）コレね弟子ってぇかまあ　犬ッコロみてえなもんでアタシもうっかりしたもんです」▼同様に江戸・東京下町らしさを表す自称詞に「あっし」がある。「あっし」が職人や、渡世人などに用いられて威勢の良さを担うのに比べると、「あたし」には上品さや知性が感じられる。たとえば、映画『続・男はつらいよ』の中で、東京都葛飾区柴又の出身である渡世人の車寅次郎は、普段は「あっし」と自称するが、夜店でいんちきな占いを行う際には、観衆を信用させて儲けを得るために、「あたし」、あるいは「あたくし」を用いている。＊映画 続・男はつらいよ（監督：山田洋次）〔一九六九〕「（車寅次郎）あなただってその一つにすがりたいような悩みがあるから、あたしの話を聞いてるんだねえ。」

［依田］